

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：12603

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26780353

研究課題名(和文) 大学生の共創的越境力を促進する教育方法・評価法の効果に関する実証的研究

研究課題名(英文) Empirical research on the educational methodologies and evaluation systems that promote university students' capacities for co-creative boundary crossing

研究代表者

田島 充士 (Tajima, Atsushi)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号：30515630

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、異なる生活・実践文脈を背景とする話者同士の生産的な対話を示す「共創的越境」を可能とする人材育成を志向した大学教育の方法・評価法について検証を進めてきた。理論研究としては、学習者間のコミュニケーションを志向する教育研究者が多く引用する、ロシアの心理学者ヴィゴツキーと文芸学者バフチンの理論研究を進めてきた。実践研究としては、大学生100名前後の大型講義を含む複数の授業を対象に、共創的越境への参加能力を高める為の教育法を開発・実施してきた。さらに、受講学生を対象とした質問紙調査や面接調査を実施し、これらの成果を踏まえた、共創的越境力の評価方法の開発も行ってきた。

研究成果の概要(英文)： This research project developed educational methodologies and evaluation systems to promote university students' abilities to participate in productive dialogues with those from different backgrounds. I have termed this type of dialogue "co-creative boundary crossing".

I examined the psychological theories of L. S. Vygotsky and the dialogical theories of M. M. Bakhtin, which have frequently been cited by educational researchers aiming to promote interactions between students in classrooms. I developed educational methodologies for university classes, including large-scale lectures with about 100 students. These methodologies can help students to improve their capacity for co-creative boundary crossing. Finally, I developed evaluation systems to assess the co-creative boundary crossing abilities of students, utilizing theoretical and practical research outcomes.

研究分野：教育心理学

キーワード：大学教育 学問知 実践知 分かったつもり アクティブラーニング 共創的越境 グローバル人材対話

1. 研究開始当初の背景

大学において多くの学習者が抽象的な理論知を示す「学問知」を、社会実践の現場で蓄積された具体的な知見を示す「実践知」と結びつけることができない、浅い言語認識にとどまる傾向にあることが指摘されている(田島, 2013)。田島は、この傾向を「分かったつもり」と呼ぶ。

一方、学問知には本来、具体的な実践知を一般的価値のある理論へと抽象化し、異なる複数の実践知と比較検討を行うことを可能とする機能があると考えられる。異質な実践的文脈を背景とする者(以下「他者」と呼ぶ)との間で異なる見解をすりあわせ、新たな知見を創出できる創造的なコミュニケーションを、本研究では「共創的越境」と呼ぶ。

本研究は、学問知の特長を活かし、個々の社会的活動に関する実践知を理論的視点へと昇華させ、他者との交流を通して実践的課題を解決できる、共創的越境への参加力(以下「共創的越境力」と呼ぶ)を促進し得る大学教育の方法および評価法の開発・効果検証を行うものである。そのため大学生の学問知の理解を、分かったつもり水準にとどめず、社会現場における実践知と創造的に接続し得る対話力およびリテラシーを育成することが目指される。

この種の教育としてすでに実施されているプログラムとして、学生が在学中、学外の企業や教育現場などを定期的に訪問し、そこで学ぶ実践知と学問知を接続するインターンシップなどの実践体験型演習があげられる。しかしこれらの演習において、現場で学ばれる実践知と大学で学ばれる学問知を接続する省察が、自主的に参加学生によってなされることは困難であり、かえって学問知学習の軽視につながる場合もあるという課題が指摘される(田島, 2014)。またこのような教育システムの維持にはかなりの労力が必要であり、教員養成を主目的とする教育学部など特定の社会実践との接続が必須である学部以外で実施することは容易ではない。そのため、大学授業改革の普遍的なモデルには設定しにくいという問題も指摘できる。

そこで本研究では、大学内で実施される正課の授業において、学問知を介した共創的越境を可能とする方法論を探る。さらに、この種の教育を多くの大学教育現場において普及させるため、20名程度の履修者を対象とした小型の「ゼミ型授業」および、100名程度の履修者を対象とした大型の「講義型授業」においても実施できるモデルを提供する。さらに、それぞれの授業モデルに対応した教育評価法も開発する。

大学生の共創的越境力を促進する教育方法・評価法開発に関連する先行研究としては、学習者による情報収集・資料分析・発表活動などの主体的な学習を示す「アクティブラーニング」を実現するための教育方法・評価法開発に関する諸研究があげられる。しかし申

請者が本研究を開始した当時、学問知の抽象化機能に着目し、それを異質な活動文脈を背景とする他者との創造的な相互交流の実現に活かすことを中心的な目標として設定した実践研究はなかった。その点において、本研究の新奇性が認められる。

本研究が着目する共創的越境力は、異質な文化的価値・見解を持つ人々と協働しながら創造的な仕事を進めることができる能力を示す「グローバル人材」(文部科学省)に関わる重要な能力の一つにも位置づくと考えている。学問知の持つ本来の機能に着目し、グローバル人材の基盤的な能力に位置づく共創的越境力の育成に関する普及型の教育・評価モデルを提供することは、現代社会における大学教育の実践的価値を確認し、高めていく上で意義があると考えている。

2. 研究の目的

本研究では、上述の問題意識に基づき、大学教育における大学生の共創的越境力を育成し得る教育方法と評価法の開発・実施およびそれらの効果検証を行う。具体的には、以下の三つの観点から検討を行う。

第一に、共創的越境の定義および、共創的越境力を目指した学習者の成長像について、理論的な根拠づけを行う。また大学における教育方法および評価法の最新事情についても情報収集を進め、共創的越境力を促進する教育実践の開発に役立てる。

第二に、以上の理論研究の成果をもとに、共創的越境を教室内で実現し、また履修者の共創的越境力を促進し得る教育方法の開発および実施を行う。これらの教育方法は、少人数を対象としたゼミ型授業および、大人数を対象とした講義型授業ごとに関係を進め、これらの実践に対する効果検証も合わせて行う。

第三に、以上の授業を通して学生が習得すると考えられる共創的越境力を適切に測定する教育評価法の開発および実施を行う。

3. 研究の方法

本研究では、目的において述べた観点を背景とし、以下の研究プロジェクトを企画し、検証を行う。

(1) 共創的越境の定義およびその実現を目指す学習者の成長モデルの提案(理論研究)

学習者間のコミュニケーションを重視する授業研究を行う専門家間で、国際的に高く評価されるロシアの心理学者・ヴィゴツキーの教育・発達心理学に関する諸理論および、同じくロシアの文芸学者・バフチンの対話に関する諸理論に着目する。これらの理論的視座から、共創的越境および、共創的越境力を目指した学習者の成長像に関連する概念について整理・検討を行う。

また大学における教育方法および評価法

の最新事情についても検討を行う。

(2) 共創的越境力の育成を目指した教育方法の開発および効果検証（実践研究）

大学授業に参加する学生を対象にした、以下の検証を行う。

ゼミ型授業の開発

履修者自身がテキストを読解し、その内容についてプレゼンテーションを作成・発表し、他の履修者からの質問を受ける、共創的越境の実現を目指したゼミ型授業の開発を行う。この授業では、具体的な社会問題について、授業で導入された抽象的な学問知を活用し、これらの問題に関連する複数の実践知を収集・分析することで、その解決を図るという課題を設定する。この種の授業における学習者間のコミュニケーションを越境的なものにするためには、発表を聴く他の履修者が、授業文脈を共有しない異質な他者の立場からリアルな批判的質問を行えるようになる必要があることが知られている(田島, 2014)。本授業ではこの知見を生かし、履修者が互いに他者としてふるまうこと、他者として行うコミュニケーションがリアリティをとまなう越境のパフォーマンスになることを可能とする条件設定について検討を行う。そして履修者の扱う学問知が、この共創的越境を促進する上で果たし得る役割についても分析を進める。

講義型授業の開発

教員の視点から情報提供された学問知を介し、複数の実践的背景から学生同士で批判的検証を行う越境型のグループ活動を導入した、講義型授業を開発する。特に、この学生間のコミュニケーションが新たな知を創出する共創的越境となり、(分かったつもりではなく)多面的な実践知を相互検証するものとして学問知を機能させ得る介入法の検討に注力し、その効果を検証する。

(3) 共創的越境力を測定する教育評価法の開発および効果検証（実践研究）

(1)の理論研究および(2)の研究授業に関する実践研究の成果を受け、学生の共創的越境力を測定する評価方法について開発を行う。この評価方法は、ゼミ型授業用と講義型授業用に分けて開発する。

ゼミ型授業向け評価方法の開発

ゼミ型授業に向けた評価法では、a)研究発表者と他者の立場から質問を行う聞き手との間で展開されるコミュニケーションの質、b)研究発表資料に見られる聞き手(他者)の視点への配慮の程度、c)研究発表資料の論理性の程度の三観点から共創的越境力の定義を行い、これらの行動を促進し得る学生評価

を行う。

講義型授業向け評価方法の開発

講義型授業に向けた評価法では、授業内において実施した学生間のコミュニケーション経験に近似するレポート課題の設定を行う。具体的には、学習内容に関して、異質な他者との交流を想定した問答型のレポートを作成させ、その問答が共創的越境の定義に該当するものかどうかを検証する。また同時に、従来型の学術的レポートも実施し、その評価との比較から、新規に設定した問答型の課題評価の妥当性も検討する。

4. 研究成果

本研究で設定した研究プロジェクトごとに、研究成果を報告する。

(1) 共創的越境の定義およびその実現を目指す学習者の成長モデルの提案（理論研究）

研究期間の前半では、ヴィゴツキーの教育心理学に関する理論研究を重点的に実施した。その結果、ヴィゴツキーは異質な文脈を背景とする他者を相手とする書きことばを典型例とする越境的なコミュニケーションを可能にしていく成長を「発達」と呼び、学校で教授される学問知(科学的概念)の抽象性を操作することを通して、この発達が達成されると捉えていることが分かった。そして学問知の抽象性を駆逐することで、時空間を異にする複数の関連する実践知(生活的概念)の相互参照を可能とし、また総合的に考察できるようになるとヴィゴツキーが考えていることが明らかになった。さらにヴィゴツキーが捉える、この種の生産的な交流(学習者の思考における内的交流も含む)は、本研究において提唱した共創的越境の定義に合致することも確認できた。

そしてこの種の交流を実現する実践として、ヴィゴツキーも引用するロシアの演劇家・スタニスラフスキーの俳優教育(同じ脚本を共有する俳優同士のロールプレイを、各々の俳優独自の思考文脈を深めていくことで、異質な他者同士の緊迫感あるリアルなコミュニケーションにしていく介入法)を応用することが有効であることも示唆された。

後半では、パフチンの対話理論を中心に検討した。その結果、パフチンは特定の活動文脈の中で自動的に受け入れられ、自明視されてきた世界観が、他者との交流を通じて揺り動かされ(異化され)、異質な視点を持つ相手との対話により、新たな世界観の獲得を可能とすることを重視していることが分かった。このパフチンの捉える対話モデルは、本研究の共創的越境に関連し、さらにその具体像を明確化するものと考えた。

以上のヴィゴツキー・パフチン論の視点から、本研究で目指すべき共創的越境とは、異質な他者との異化的な相互交流を通じ、学習

者自身の視点から自分自身の知識を柔軟に再解釈する活動であることが確認された。また、この共創的越境力を得るまでの成長過程に学問知が貢献し得ることも、理論的に根拠づけられた。また共創的越境力を促進させ得る方法・評価法として、演劇理論に基づくロールプレイ型の介入法に着目し、最新の大学教育研究の知見も参照しながら、その実施可能性について検討を行った。

これらの成果は学会発表、著作、学術誌等で発表し、教育改革に関わる基礎的な理論研究として、複数の学術誌において引用されるなどのインパクトを与えた。

(2) 共創的越境力の育成を目指した教育方法の開発および効果検証（実践研究）

共創的越境力の育成を目指したゼミ型授業と講義型授業を開発した。研究期間内において、ゼミ型授業は計3回、講義型授業は計4回実施した。

ゼミ型授業では、教育心理学に関する課題テキストから学んだ学問知に関する研究発表を行わせ、この発表を聴く他の履修者に対し、他者の批判的な視点から具体的な社会問題（実践知）との関連づけを求める質問を行うよう指導した。この質疑応答がリアリティをもった交流になるよう演劇論を応用した介入を行った結果、他者による批判的な見解などの視点を取り込み、新たな視点を創出する共創的越境がみられるようになった。また発表資料の内容分析から、学問知を効果的に使用することで、他者が持ち込む複数の実践知の関係を総括的に解釈し、共創的越境を実現することにつながることも分かった。

この基礎的な授業研究を踏まえ、海外に滞在経験のある学生を対象とし、異文化状況の中で見知った問題（実践知）について、大学において学んできた学問知を活用した解決策を探る研究を行わせる発展的授業（「世界と越境するフォーラム」と名づけた）も開発・実施した。上記の授業と同様、参加者は学問知を介した実践的な問題解決を創造的に探る共創的越境を相互に行えるようになることが明らかになった。

講義型授業では、生徒指導論に関するテーマを対象とし、受講者100名程度を対象としたプログラムを開発した。講義を通じて学んだ学問知について、異なる関心を持つ関係者を想定したロールプレイ型の議論活動を導入し、演劇論を応用した介入を行った。異質な関心を持つ他者の役割をリアルに演技できるようにし、その視点から学問知の解釈を批判的に迫る対話を導入することが、この種の議論を複数の実践知間の関係を創造的に解釈する共創的越境にしていくポイントであることが分かった。

また以上の実践プログラムの実施を通じ、他者の役割を担う相手との信頼関係が、互いの発話に対する批判的な検討を促進すると

ということも分かった。

これらの授業開発に際し、民間企業の人材開発に関わる複数の実践家への意見聴取も行き、実社会において発揮し得る実践的能力の養成につながることを確認した。

以上の研究成果は、学術誌・学会発表・著作などで発表したほか、研究代表者が所属する東京外国語大学におけるFD研修会において、学内の教員へのフィードバックを行った。

(3) 共創的越境力を測定する教育評価法の開発および効果検証（実践研究）

ゼミ型授業に準拠した評価法を開発するため、発表資料及び質疑応答の質に関する基準を設定した。これらの基準は、(1)の理論研究および、(2)の授業実施を通して得られた知見にもとづき、他者の批判的な視点から発表内容について検討を行い、また批判的な質問に応じることで新たなアイデアを創出する共創的越境の特徴を示す能力を定義づけたものであった。この基準をもとに学生が行う発表の内容や質疑応答を教員が評価し、形成的な助言を行う介入を行ったところ、授業開始当初と比較して、学生間の共創的越境を増加させる効果が認められた。

また発展授業である「世界と越境するフォーラム」において、上記の評価基準を使用して、聞き手となった履修者が発表を行う履修者を評価するピアビュー制度を取り入れたところ、学生間の共創的越境を促進する上で一定の効果が確認された。

講義型授業に準拠した評価法として、授業中に実施した議論活動を反映した、異質な他者との交渉プロセスを想定した対話型レポートの開発を行った。設定された課題について、授業で学んだ学問知を活用し、異質な関心を持つ他者の批判的な質問および、その回答を学習者本人が書き込んでいく越境的対話を展開する形式のレポートであった。従来型のレポートを組み合わせることで開発した評価法を実施した結果、従来型のレポートで高評価を得た学生の対話型レポートは、低評価だった学生のもものと比較して、ゼミ型授業に準拠して定義づけた共創的越境の特徴がより強く見られたことが明らかになった。またこのようなレポート課題を事前に学生に提示することで、授業中に展開する越境的対話への共創的な参加を促進できる可能性も示唆された。

なお以上の研究成果は、学術誌・学会発表・著作などで発表を行った。さらにこれらの研究成果が評価され、高等教育研究の専門家として、学校現場の教員を対象とした教員研修・講演会などの講師を複数回にわたり担当する機会を得た。

<引用文献>

田島充士（2014）インターンシップ：フレイレの教師論からみた越境の説明

富田英司・田島充土（編）大学教育：越境の説明をはぐくむ心理学 ナカニシヤ出版, pp.145-163.

田島充土 (2013) 異質さと共創するための大学教育：ヴィゴツキーの言語論から越境の意義を考える 京都大学高等教育研究, 19, 73-86.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計6件)

田島充土 (2018) ヴィゴツキー理論からみた「分かったつもり」と子どもたちの発達 (特集「『わかったつもり』に気付かせる理科授業の工夫・改善」)理科の教育, 67, 145-149. (査読無)

田島充土 (2016) 言葉の理解およびその教育可能性をヴィゴツキー・内言論から捉える: スタニスラフスキー・ポドテキスト論を補助線として ヴィゴツキー学、別巻4、45-57. (査読有)
<http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/87545>

田島充土 (2015) 学習者を異世界へいざなう教科教育の価値とは: 分かったつもりから越境的交流へ 教育心理学年報, 54, 216-218. (査読無)

田島充土 (2015) 「分かったつもり」のメリット・デメリットとは 教育心理学年報, 54, 166-167. (査読無)

田島充土 (2014) ヤクピンスキー・バフチン・ヴィゴツキーの論にみるモノローグ・ダイアログ概念の展開: 社会集団の斉一性と人格の独自性とをめぐって ヴィゴツキー学、別巻3、1-20. (査読有)
<http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/87544>

Atsushi Tajima (2014) Development as performing otherness: Using Vygotsky and Stanislavski to create real discussions. 第15回国際ヴィゴツキー学会発表論文集、2、172-176. (査読有)

[学会発表](計23件)

田島充土 指定討論: 文化心理学の立場から 国際シンポジウム・社会構築主義の視点と臨床の現場: Vivien Burr 教授をお招きして 2018.3.21. 東京大学

田島充土 教育実践を理解するためのバフチン・ダイアログ論: 豊かな異文化交流の実現 2018.1.20. 言語文化教育研究会特別企画講演会、早稲田大学

田島充土 コメンテーター 東京外国語大学文書館講演会「新美南吉と東京外国語大学の思い出」2018.1.19. 東京外国語大学

田島充土 メディア論からみたヴィゴツキー: 話しことばと書きことばの交錯としての発達論 2017.12.27. ヴィゴツキー学協会口頭発表

田島充土 留学体験等のふりかえりに大学の授業は いかに関与しうのか: 学問知と実践知を統合する「世界と越境するフォーラム」の試み 2017.10.7. 日本教育心理学会第59回総会ポスター発表、名古屋大学

田島充土 指定討論 Yes and Cafe 2017.8.16. ジャパン・オールスターズ公開連続講演会 2017『パフォーマンス心理学入門』、筑波大学

田島充土 バフチンおよびヴィゴツキー理論と言語文化教育 2017.2.9. 言語文化教育研究会月例企画講演会、早稲田大学

Atsushi Tajima Chair of the session "Ostranenie between Russian, English and other languages." 2016.12.16. One Hundred Years of Ostranenie, University of Erfurt

Atsushi Tajima Chair of the session "Psychological and Psycholinguistic Approaches." 2016.12.16. One Hundred Years of Ostranenie, University of Erfurt
鎌田紗矢香・田島充土 『俳優の創造活動』とヴィゴツキー・内言論との関係について 2016.11.6. ヴィゴツキー学第18回大会口頭発表

田島充土 実践現場において共創的越境を実現する大学教育の展開可能性 自主企画シンポジウム『学問知と実践知の共創的な越境可能性を問う: 学校インターンシップの科学(企画: 田島充土・森下覚)』2016.10.8. 日本教育心理学第58回総会口頭発表、香川大学

Atsushi Tajima Bifurcation as a process of dialogic estrangement when talking about life from a Bakhtinian perspective (invited oral presentation). 2016.9.9. 9th International Conference on the Dialogical Self, University of Lublin

Atsushi Tajima Dramas as devices for communicating with alien selves: Connecting Stanislavsky's notion of "podtekst" with Bakhtin's "chronotope" (oral presentation). 2016.9.8. 9th International Conference on the Dialogical Self, University of Lublin.

田島充土 教室における越境的ダイアログは実現可能か: 大学教育の現場をフィールドとして 自主企画シンポジウム『「文化・共同体・文脈」の幻想性を穿つ: 越境について考える(企画: 田島充土・小島康次・川野健治)』2016.4.30. 日本発達心理学会第27回大会口頭発表、北海道大学

田島充土 教室に越境的交流を持ち込む教員の役割と学生の省察可能性: ヴィゴツキー論を視点として 参加者企画セッション『省察活動の効果的導入に関する研究の現在』(企画: 田島充土) 2016.3.18.

第22回大学教育研究フォーラム口頭発表、京都大学

田島充土 ドラマとしてのヴィゴツキー論：学びをダイナミックな場とするためのリサーチクエストの構築 招待講演『リサーチ・クエストの構築過程を知る』 2016.2.21. ナラティブと質的研究会・生存のナラティブと質的研究会、立命館大学

田島充土 ヴィゴツキーのモノローグ(内言)論：スタニスラフスキー・ポドテクスト論に着目して 2015.11.3. ヴィゴツキー学第17回大会口頭発表

田島充土 パフチンの人格論からみた社会集団：社会的言語の統一性と人格的言語の個別性は対話の中でいかに実現するのか 自主企画シンポジウム『「文化・共同体・文脈」の幻想性を穿つ：「私たち」とは誰のことなのか(企画：田島充土・小島康次・川野健治)』 2015.3.20. 日本発達心理学会第26回大会口頭発表、東京大学

田島充土 指定討論 自主企画シンポジウム『対象(object)と心をめぐる文化心理学的アプローチの可能性：意味構築における実在物の役割に焦点をあてて(企画：小松孝至・木戸彩恵)』 2015.3.20. 日本発達心理学会第26回大会口頭発表、東京大学

田島充土 ダイアログの思想から教育実践を考える：パフチン理論を視点として 2015.3.1. 第20回FDフォーラム口頭発表、大学コンソーシアム京都

⑳ 田島充土 学習者を異世界へいざなう教科教育の価値とは：分かったつもりから越境的交流へ 研究委員会企画シンポジウム『教科教育はどこまで迫れるか(4)：教育目標をどう扱うべきか(企画：工藤与志文・藤村宣之)』 2014.11.9. 日本教育心理学会第56回総会口頭発表、神戸大学

㉑ Atsushi Tajima Boundary crossing through dialogues in self: Performing "otherness" between peer learners (oral presentation), 2014.8.20. 8th International Conference on the Dialogical Self 2014, The Hague University of Applied Sciences

㉒ 田島充土 科学的概念の学びにみられる“遊び”と“ドラマ”：ヴィゴツキーの発達論のおもしろさとは 2014.8.3. ヴィゴツキー学協会・『思考と言語』出版80周年記念ヴィゴツキーセミナー基調講演

〔図書〕(計5件)

田島充土(2018)理科の学習 青山征彦・茂呂雄二(編著)『スタンダード学習心理学』pp.110-129.サイエンス社

田島充土(2016)ヴィゴツキー理論とその展開 田島信元・岩立志津夫・長崎勤(編著)『新・発達心理学ハンドブック』pp.73-86. 福村出版

田島充土(2016)学問知と実践知との往還

を目指す大学教育：学校インターンシップにおける共創的越境 田島充土・中村直人・溝上慎一・森下覚(編著)『学校インターンシップの科学：大学の学びと現場の実践をつなぐ教育』pp.1-28. ナカニシヤ出版

田島充土(2016)ヴィゴツキー理論：共創的越境を実現するプロセスとしての発達 田島充土・中村直人・溝上慎一・森下覚(編著)『学校インターンシップの科学：大学の学びと現場の実践をつなぐ教育』pp.67-85. ナカニシヤ出版

田島充土・中村直人・溝上慎一・森下覚(2016)学問知と実践知との往還を通じた共創的越境の実現とは：学校インターンシップの未来へ 田島充土・中村直人・溝上慎一・森下覚(編著)『学校インターンシップの科学：大学の学びと現場の実践をつなぐ教育』pp.297-303. ナカニシヤ出版

〔その他〕(計7件)

田島充土 子どもたちの学びを主体的に深化させるコミュニケーションと人間関係：グローバルに生きるための対話と能力 2018.2.17. 研究発表会招待講演、大阪教育大学附属天王寺小学校

田島充土 アクティブラーニング実践報告：実践知と学問知の融合としての対話教育 2018.2.13. FD研修会、東京外国語大学

田島充土 学校で学ぶべき知識とコミュニケーション力：ヴィゴツキー理論からみた教師の役割 2017.8.18. 新授業デザイン研究会主催招待講演会、大阪教育大学附属天王寺小学校

田島充土 報告：「世界と越境するフォーラム」授業実践 2017.5.30. 公開 TUFSToday・東京外国語大学ホームページ (<https://tufstoday.com/articles/170518-2/>)

田島充土 著名なヘッドハンター武元康明氏、講演 2016.11.14. 公開 Topics・東京外国語大学ホームページ (http://www.tufs.ac.jp/NEWS/2016/post_840.html)

田島充土 講演会解説 2016.10.20. 言語文化学部主催講演会『21世紀はヤジロベエ(武元康明(サーチファームジャパン代表))』東京外国語大学

田島充土 子どもが学校の中で成長することの意味：ヴィゴツキー理論からみた教師の役割 2016.8.23. 招待講話、兵庫県伊丹市立有岡小学校

6. 研究組織

(1)研究代表者

田島 充土 (TAJIMA Atsushi)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号：30515630